近代文学研究叢書
第三十九巻

昭和49年3月5日　印刷
昭和49年3月20日　出版

〔¥ 2500〕

著者　昭和女子大学近代文学研究室

発行者　東京都世田谷区太子堂一丁目七番地
小林寅次

印刷者　東京都千代田区神田錦町三丁目十四番地
梶原忠幸

発行所　東京都世田谷区太子堂一丁目七番地
昭和女子大学近代文化研究所
振替口座　東京一七〇八六七番
電話代表(422)五一三一番

日文 701533389

近代文学研究叢書

第三十九巻

昭和女子大学
近代文学研究室

監

修

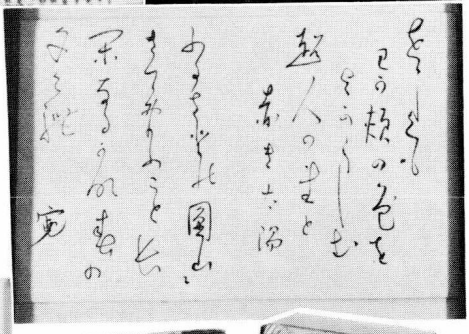
池田亀鑑（国文学）
石田吉貞（国文学）
石森延男（児童文学）
上田三郎（英語学）
太井磯吉（比較文学）
岡本生（近代文学）
荻原保水（俳文学）
片桐顕智（和歌文学）
金子健二（英文学）
河野実（歴史学）
木俣修（和歌文学）
坂本五郎（英文学）
佐々木八郎（国文学）
笹沢美明（独文学）
佐藤幹夫（国文学）
伯梅友允（文法学）
宮島二郎（英文学）
山田鐐助（比較文学）
玉井幸一（国文学）
辻村鑑（英文学）
内藤濯（仏文学）
中林謙二（英文学）
成瀬正勝（近代文学）
能勢朝次（国語学）
浜田敦（美学）
人見円吉（近代文学）
保坂都（国文学）
本間久雄（近代文学）
村松定孝（国語学）
吉田澄夫

←肖像

主筆　與謝野鐵幹

明星

第一號



鐵幹子

鐵幹　與謝野寛著

天地玄黃

東京　明治書院

鐵幹　與謝野寛著

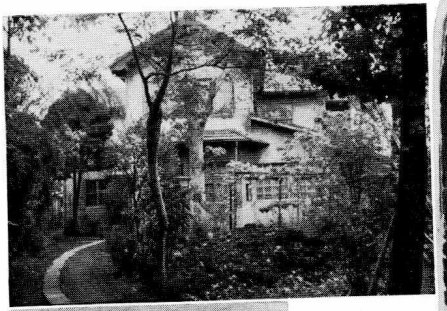
東西南北

東京　明治書院

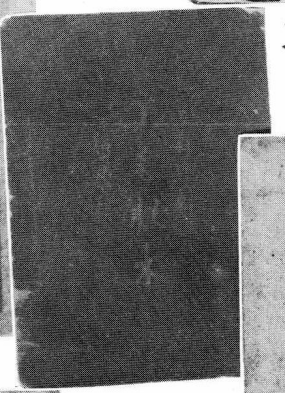
→筆蹟
↑明星創刊号―明治三十三年四月
下右より「東西南北」―明治二十九年七月刊
「天地玄黃」―明治三十一年一月刊
「鐵幹子」―明治三十四年三月刊
（昭和女子大学蔵）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

與謝野　寛（二）



→旧居跡—東京都杉並区荻窪四—三—二二



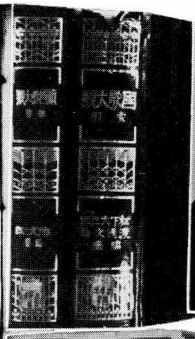
↑「毒艸」—明治三十七年五月刊
←「櫛之葉」—明治四十三年七月刊
「うもれ木」—明治三十五年十二月刊
↓「紫」—明治三十四年四月刊
（昭和女子大学蔵）

↑「巴里より」—大正三年五月刊
（昭和女子大学蔵）

↑墓　東京　多磨霊園

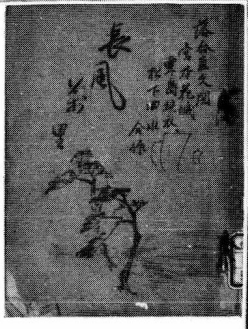
松下大三郎（一）

←肖像



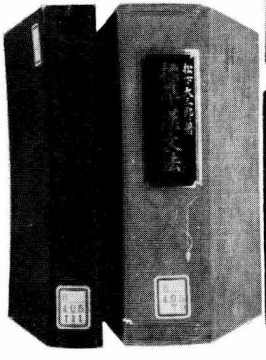
→「国歌大観」索引、歌集—明治三十三年十二月刊
「標準日本文法」—大正十三年十二月刊
（昭和女子大学蔵）

←「新国学」—明治三十年十月創刊

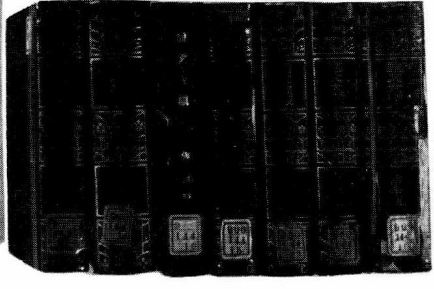


→「長風万里」—明治三十年十二月刊
（昭和女子大学蔵）

↙「紫紅集」—明治三十三年十月刊
（昭和女子大学蔵）

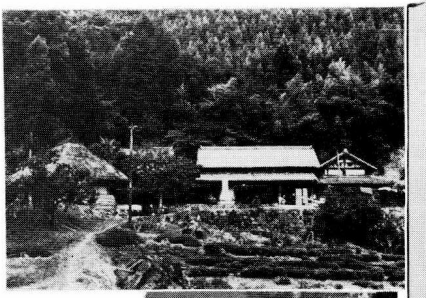


→「標準漢文法」—昭和二年十月刊
「標準日本口語文法」—昭和五年二月刊
（昭和女子大学蔵）

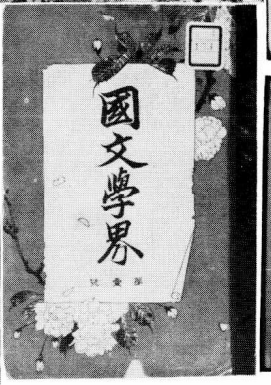


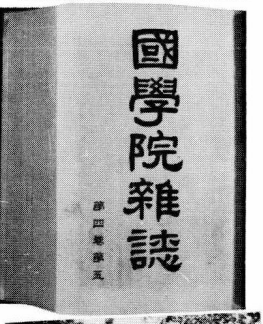
←「国文大観」—明治三十六年一～十二月刊

松下大三郎（二）

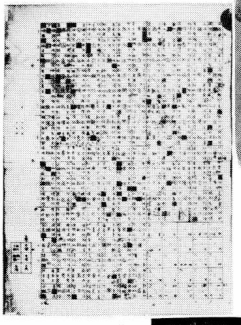


→大三郎生家（静岡県）

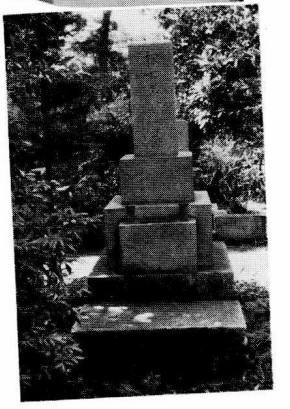


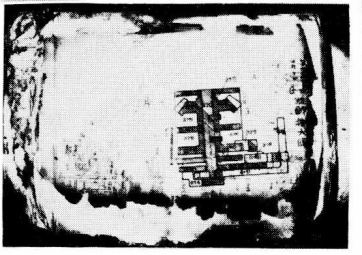


→「少年園」―明治二十五年七月
「国学院雑誌」―明治二十九年十二月
「国文学界」―明治三十三年一月
（昭和女子大学蔵）



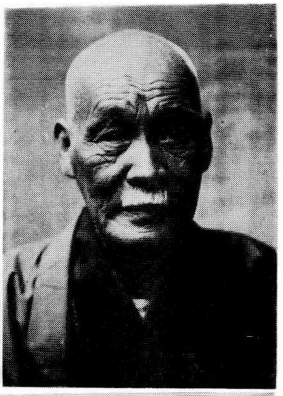
→墓
東京　多磨霊園





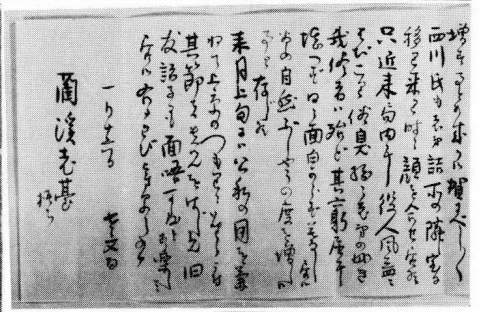
↑→
タイプライター設計図
（塩沢重義氏蔵）

野崎左文

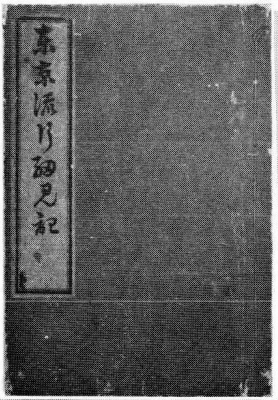


←肖像（野崎英子氏蔵）

→「私の見た明治文壇」―昭和二年五月刊（昭和女子大学蔵）

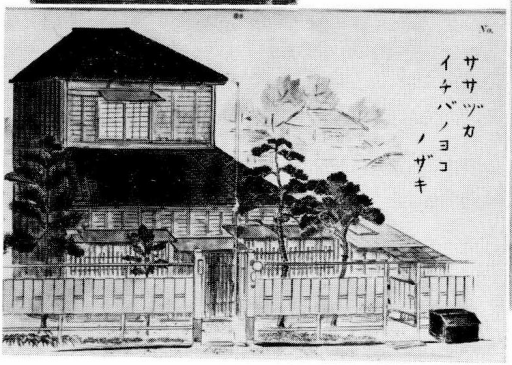


←筆蹟―三品蘭渓宛書簡（本間久雄氏蔵）



→「東京流行細見記」―明治十八年月刊（本間久雄氏蔵）

↑狂歌雑誌「みなおもしろ」―大正四年五月刊（昭和女子大学蔵）



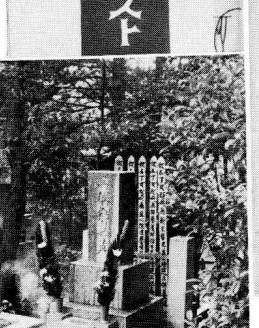
↓お孫さんの為のスケッチブックから（野崎英子氏蔵）

高橋五郎

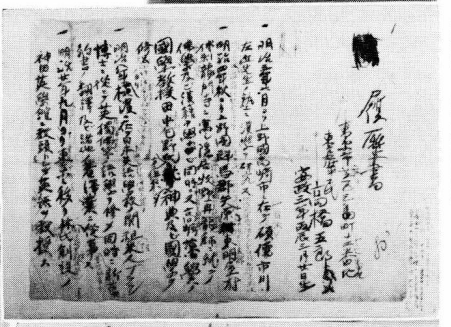
←肖像

←「聖福音書」上下—明治二十八年十二月刊
三十年三月刊
（昭和女子大学蔵）

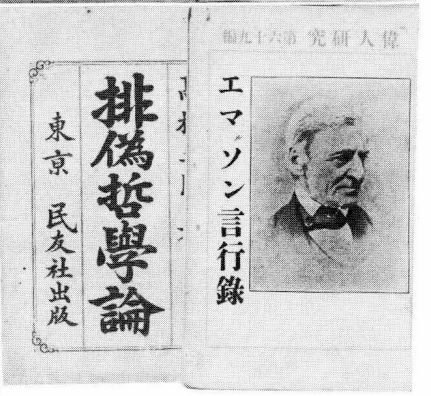
←「新人生観」—明治四十三年五月刊
「ファウスト」—明治三十七年八月刊
（昭和女子大学蔵）



←筆蹟（木村嘉次氏蔵）



←墓　東京　多磨霊園

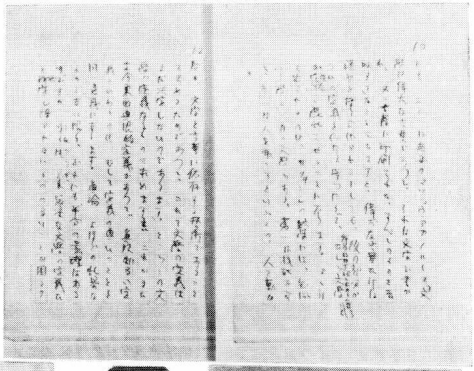


↑「排偽哲学論」—明治二十六年六月刊
「エマルソン言行録」—大正元年八月刊
（昭和女子大学蔵）

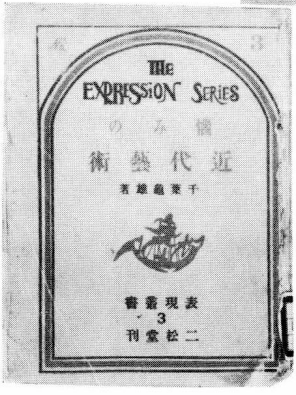
千葉亀雄（一）

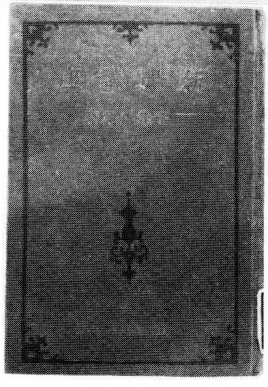
↓「日本仇討物語」上下—大正六年六月刊
「仇討五十種」—大正十四年六月刊
（三康図書館蔵）

→肖像



←筆蹟（千葉泰二氏蔵）

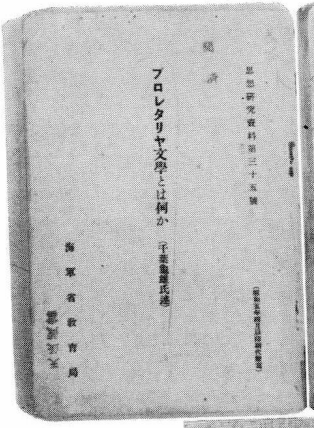




↑「悩みの近代芸術」—大正十二年二月刊
「ヴェンデッタ」—昭和六年三月刊
「新聞講座」—大正十四年四月刊
（昭和女子大学蔵）

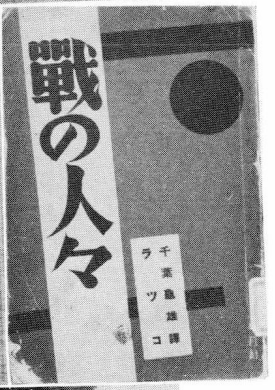
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

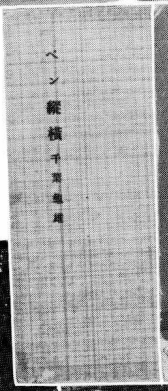
千葉亀雄（二）



→「いざさらば」—明治三十四年十月刊

「プロレタリヤ文学とは何か」—昭和五年四月刊
（昭和女子大学蔵）





→「ペン縱横」—昭和十年九月刊
（昭和女子大学蔵）

→「戰の人々」—昭和五年三月刊
（昭和女子大学蔵）

↑千葉亀雄文学碑　千葉家墓地内

千葉家之墓→
東京　多磨霊園

目次

口絵
第三十九巻の成立……昭和女子大学近代文学研究室…(一三)
凡例……昭和女子大学編集室…(一七)
與謝野寛……近代文学研究室…(一九)
松下大三郎……近代文学研究室…(一六七)
野崎左文……近代文学研究室…(二〇三)
高橋五郎……近代文学研究室…(二四七)
千葉亀雄……近代文学研究室…(三一七)
近代文芸年表(38)……近代文学研究室…(四三三)
巻末付記……近代文学研究叢書編集室…(四九五)

第三十九巻の成立

本巻は昭和期第十四巻として昭和十年三月から昭和十年十月までに歿した左記五名の研究調査を収めた。

与謝野寛は歌人、詩人、号は鉄幹。明治六年（一八七三）二月、父礼厳（らいごん）母ハツェの四男として京都に生まれた。十七歳で得度したが僧籍に身をおく意志はなく文学の道を歩みはじめる。二十歳の秋上京、落合直文の門下となり浅香社に入って尾上柴舟、金子薫園らとその主要同人となる。新聞「日本」「二六新報」紙上で活躍、歌論「亡国の音」を発表して高崎正風らの御歌所派の和歌を柔弱卑俗として攻撃し〝ますらをぶり〟の作品実践を主張した。二十九年七月処女詩集『東西南北』を、ついで三十年『天地玄黄』を刊行。「新詩会」の佐佐木信綱、正岡子規らと共編で合同詩集『この花』を上刊。浅香社の分社として「東京新詩社」を創立。機関誌「明星」を創刊、広く青年層に呼びかけて和歌革新運動の炬火を点じた。夫人晶子の『みだれ髪』は「明星」における指標となりその隆盛のきっかけとなったが、折から勃興した自然主義の潮流に抗しきれず百号を以て廃刊。晶子と共著の『巴里より』は明星終刊後の失意と落莫の思いをパリに癒したものである。詩歌集『鴉と雨』他多数の著作をなした一方、慶応大学教授及び文化学院を創立するなど子女の教育に尽瘁した。又『日

本古典全集』の編集に参与、昭和三年満蒙に旅し『満蒙遊記』の著がある。昭和七年には『与謝野寛短歌全集』を刊行。晩年は旅に多くの日月を送り昭和十年三月、肺炎の為慶応病院で死去、享年六十二歳。

松下大三郎は国文学者。曲水、花夕の号をもつ。明治十一年（一八七八）十月、父久三郎母さみの長男として静岡県磐田郡豊岡村に誕生。幼少の頃より読書を好み、作文には特に秀でていた。少年雑誌『少年園』に和歌、紀行文をさかんに寄稿、『中等教育日本文典』とスキントンの英文典を比較対照して日本文典の不備に気づくという、文法学に対する才能のひらめきをみせた。明治二十六年夏、上京して東京専門学校（早稲田大学）及び国学院に学び落合直文、物集高見らに師事した。国学院の同窓会雑誌「新国学」には文法、哲学、宗教、国学、新体詩、恋愛論に至る広い分野で健筆をふるった。三十二年、女学雑誌「姫百合」を友人丸岡桂とともに創刊、三十四年まで続いた。最初の著書『日本俗語文典』はわが国の口語文典の嚆矢となった。又『国歌大観』『国文大観』を編み、和歌及び古典研究の上に大きな便宜を与えた。一方、発明にも力を入れ、後年タイプライターでは特許を得ている。三十八年、中国留学生養成学校宏文学院に講師として日本語を教授、又自らも大正二年、日華学院を創設して中国留学生を教育した。十二年の震災直後国学院大学講師となり文法研究に専念、その特色とする理論文法は『標準日本文法』『標準漢文法』『標準日本口語法』等の主著に具現されている。昭和七年、文学博士号をおくられる。同十年五月、宿痾脳溢血にて死去、享年五十七歳。

野崎左文はジャーナリスト、狂歌研究家。本名城雄。安政五年（一八五八）九月土佐国高知に生まれた。慶応二年八歳で長崎に遊学して英語を学び明治二年藩費生として上京し大学南校で正則英語を二年半学んだ。かねて戯作に興味を持ち、明治九年仮名垣魯文に入門、小新聞の投書からはじめて次第に戯作生活に入った。左文の号は彼が性来左利きで和文は左横書き欧文は縦書きの癖をもじって魯文が名づけた。明治十三年魯文の世話で「仮名読新聞」の見習記者となりその後「明治日報」の編集長となるが二度の筆禍事件を起こし退社。その後滑稽雑誌「於見喃誌」を自ら主宰した他「浪華新聞」の創刊（明一九）に参画、雑報主任として得意の艶種小説の筆を振ったが翌年退社、その後各新聞を転々しながら斎藤緑雨、右田寅彦らとも親交をもった。明治二十五年、当時としては画期的な『日本名勝地誌』（博文館）の編集に専念、翌年滑稽雑誌「同楽叢談」を刊行、「万朝報」をもって新聞界から身をひき著述生活に入る。風俗画報、文芸倶楽部、新古文林などに自作の狂歌や江戸期の狂歌、狂歌師の紹介をのせ、鉄道を退官後はひたすら狂歌に打ちこみ「みなおもしろ」を創刊、「明治初期の新聞小説」、「明治年代の狂詩と狂歌」はじめ早稲田文学、新旧時代に多くの述作を掲載。昭和二年、これらを集大成して『私の見た明治文壇』（春陽堂）一巻となした。昭和十年六月、七十八歳をもって病歿。

高橋五郎は飜訳家、評論家。安政三年（一八五六）三月、新潟県刈田郡新田畑村（現柏崎市）に生まれた。幼少より和漢の書に親しみ市川左近に漢学を学んだ。又神典、国学を修め曹洞宗龍門寺に仮寓して仏典と漢籍を併せ

学んだ。明治七年以来、ブラウンらによる新約聖書の翻訳事業に修文記者の資格で参加、英・米・独・仏等七カ国語の語学力はこの時に培われた。評論家として宗教、哲学、文芸他各方面に関する論文を六合雑誌、国民之友に、その創刊当初より掲載し縦横の筆をふるった。明治二十三年頃より「基督教不廃物語」、「聖霊のはたらき」、「不可思議論」など心霊、宗教、哲学書の翻訳が多くなる。二十六年、井上哲次郎の『教育と宗教の衝突』に対して「偽哲学者の大僻論」、「悔悟の哲学者」を国民之友誌上に発表し、更に「排偽哲学論」を著して植村正久らと筆を揃えて論駁した。このころから時文批評の筆を捨て、キリスト教関係の翻訳に専念した。又本郷英語学校長（のち桜井女塾）、中央大学講師をつとめながら英独詩文の講註も手掛け、哲学、心霊学関係の著書も多く、その勉強ぶりは常人を超越していた。明治四十三年設立した東京市下水道株式会社の事業に失敗しその多額の負債返済の為数万冊の蔵書を手放す不幸に見舞われたが、著述の筆は依然さかんであった。晩年は駒沢大学、日本女子高等学院（現昭和女子大）等に英文学を講じたが昭和十年九月、不遇のうちに病死、享年七十七歳であった。

千葉亀雄はジャーナリスト、文芸評論家。明治十一年（一八七八）九月、父の任地の山形県酒田で生まれた。幼少時より漢文の素読を習い、百人一首を暗誦するほどであった。明治二十九年上京後は新聞配達などして苦学しながら、「文庫」の記者をふり出しに新聞界に足をふみ入れた。「日本及日本人」を経て国民新聞に入社、徳富蘇峰を畏敬した。又時事新報社会部長として社会部の地歩を固め、読売新聞では主として婦人問題に関心

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com